

Title	西洋史観(浅野利三郎著, 白林社発行)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.166(338)- 167(339)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0166">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0166</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る問題の所在を知ることが出来るので、便利なこの年鑑はまた史學者の座右にあるべきものの一つである。(間崎万里)

## 西洋史觀

(淺野利三郎著)  
白林社發行

上古の埃及に筆を起し、最近世即ち世界大戰に到るまでの西洋史を、著者独自の史觀を以て叙述せられたるものである。然らば茲に著者独自の史觀とはそも、如何なるものであらうか。序文に曰く、「唯物史觀論者は徒らに觀念的史觀論者の攻撃に急にして、小兒病的理論鬭争に耽り、文化史觀論者は唯物史觀を修正せんとして、却つてカントの理想主義に歸し、甚しきに至つては文化史と稱して文藝美術の歴史に墮しつゝある。茲に於て予は兩者の中間に立ち、如何なる物質的經濟的基礎の上に如何なる政治體系と文化様式とが發展するかを闡明せん」と試みた。但し世上所謂中間史觀又は第三史觀等とは何等の係はる所なく、予獨特の史觀に依つて西洋史を略叙したものに外ならない。斯く述べらるゝが如く本書の内容を一讀すれば、全體として著者の史觀が物質的經濟的基礎の上に樹立せられたることは直ちに首肯し得べきところであつて、從來邦人諸學者の著作にかゝる西洋史の文献に比して著しく唯物史觀的であることに注意せしめられる。例證の煩縷は避けたいが、例へばルネッサンス以後の取り扱ひに於て之を見るに、先づ第一に狹義のルネッサンスは古代の學藝の復活であるが、廣義に於ては此の刺戟によつて促された個人の自覺、及び其の精神的天地、並に空間的世界の擴大することであることなし、従つてその内

容としては、文學、思想、政治、經濟等あらゆる方面に亘る人間の欲求の解放運動であることなし、その經濟的方面に於ては、經濟的生活が宗教の制約から解放され、資本主義精神が既にそこに育成せられたと論ずるのである。又ルネッサンスと宗教改革との關係については、ルネッサンスに依つて芽生えたる個人の覺醒運動の最初の受難者が教會であつたと述べ、更に宗教改革に引き續きたる十六・七世紀の歐羅巴の亂世を、宗教改革の餘波が各國に及んだのであると見るのは皮相の見解であつて、十六世紀十七世紀に亘りルネッサンスの養つた動力が一時に各地で烽火を擧げたこと見て、始めて此の雜然たる動亂に理知の眼を配り得るのではあるまいか。述べて、宗教改革も近代的國家の起原も凡て廣義のルネッサンスに包括せらるべきものなりとし、又宗教改革と佛蘭西革命との關係を論じては、ブルジョアジの勃興が學藝の復興を伴つた事が宗教革命の原因であり、ブルジョアジの封建制度に對する第一次的反逆が當時の封建制度の國際的大中心であつた羅馬正教會に向つて宗教的假裝の下に行はれたのであると見るべきであることなし、專制主義及び封建制度に對するブルジョアジの革命である佛蘭西革命の先驅をなせるものが宗教改革であるとするのである。斯の如く、著者はルネッサンスも宗教改革も佛蘭西革命も何れもブルジョアジの勃興であつて、凡て是等は同一の系列に入れて考察すべき歴史的事實であるといふのである。是に由つて是を見れば、著者の論述には明らかに唯物史觀的傾向を窺ひ知るべきであり、而して又中世の記述に於て、主としてその時代の社會組織たる封建制度に關して述べ、その時代の精神生活の殆

ご全面とも稱すべき基督教に關する記述を省略せるなども、此の傾向を裏書するものといふべきであらう。されど著者は唯物史觀に提はれたるに非ず、今篇よく自らの史觀を以て終始し、從來出でたる多くの邦人の西洋史文献と趣きを一にせざる所に本來の特色があり價值がある。更に本書を讀みて感ずる所は、著者の史眼に冷やかなること勁秋の如きものを藏する點である。峻切にして而かも深淵の趣きはあるが、歴史家の稍もすれば陥り易き感傷や同情は微塵もこれを認めることのない點である。之に依つて著者の史觀の公平なるを知る事が出来る。序論として上古よりの史學の變遷を述べられたのは、初學者の爲の便宜のみならず、著者自らの史學に對する態度を明らかにするに役立つものであらう。紹介必らずしも當を得ざるを知りつゝも、著者に心からなる敬意を表し本書を世に奨むる次第である。

(有賀春雄)

## 日本研究 (早稻田大學日本學協會機關雜誌)

早稻田大學の西村眞次教授を中心として此度新しく季刊雜誌「日本研究」が誕生したのは、吾人の衷心より慶賀に堪へぬ所である。百五十頁で挿繪、地圖等を豊富に載せ人類學、考古學、人文地理學、民俗學等の各方面の資料を網羅せんを努め、なか／＼抜目のない編輯振である。卷頭に「提唱」をして日本學協會の目的とする所を述べてをる。即ち、それによれば同會は「或は専門的に、或は非専門的に、祖國日本の文化を再吟味し、私達日本人が祖先

以來經過して來た過程を知り、其示標によつて現在及び當來の世界に於いて、私達自身の進むべき道を見出さうとする。私達はかうした意味の日本研究に取て「日本學」(Japanology)と命名した」

日本研究の必要に就ては吾人は双手を擧げて賛同する。然し果して「日本學」(Japanology)の命名は、時宜を得たものであらうか今までの用語例に従ふとエジプト學アッシリア學支那學等は、まづ考古學言語學よりその國の文化を檢討しはじめ、ついで總體の文化現象の精密な研究に及んでをる。是等の學問は、歐洲人にまつて最初は殆ど未知な領域であり、従つて之を呼ぶに包括的な名稱をもつてした。然し之は一時的であり、次第に研究の分野の分化して來るにつれて此名稱は妥當性を缺いて來る。日本人が支那研究に對しても支那學といふ名をあまり使用せず支那哲學、支那文學、支那史、支那社會史等の名稱でこれと呼んでをるのもその研究分野が専門化せるがためである。日本それ自身の研究に至つてはなほさらである。徳川時代に國學の名稱で指稱されたもの、今や國史、國語學、國文學、日本美術史、日本考古學と數へ切れぬ程に分化してをる。今さら未開文化に對する如くこの複雑な日本文化諸相の研究に日本學といふ名を日本人自らが與ふる必要があらうか。同提唱の中にはこう云つてをる。「私達のいはゆる日本學は、必ずしもエジプト學、アッシリア學、印度學の模倣ではなくて、私達、平生相寄り、相集まつて、祖國日本の文化展開を克明に研究してゐる人々、主として青年學徒が、これまでよりも一層眞面目に、一層協力的に、其研究を進めたいといふ希望で結合